

胆管がんにオプジーボ

職業性への有効性検討

市大で治験

国立がん研究センター東病院(千葉県柏市)と大阪市立大医学部病院(同市阿倍野区)は、印刷業で使用した化学物質が原因で発生した胆管がんなどを対象に、がん免疫治療薬「オプジーボ」による医師主導の治験を始め、登録患者を募集している。と6月に発表した。職業性胆管がんは遺伝子変異が多い特徴から、



オプジーボが効く可能性が高いという。

2012年5月に大阪市中央区印刷会社で働いた従業員に胆管がんが多発していることが発覚。原因はインキ洗浄の際に使った塩素系有機溶剤の「1、2-ジクロロプロパン」などと判明した。この印刷会社では20人が胆管がんを発症し、18人が労災認定された(申請中1人、未申請1人)。患者の多くは大阪市立大病院の

久保正二教授(写真)らが治療にあたってきた。このうち現在40歳の患者は、通常の抗がん剤が効かなくなり、全身にがん細胞が広がっていた。この患者の胆管がんは、化学物質の影響が考えにくい通常の胆管がん患者に比べ、遺伝子の変異が約30倍にもなっていた。一方、がん細胞が免疫細胞にかけているブレイキを外すオプジーボは、遺伝子変異の多いがんのタイプに効きやすいと考えられている。

そこで、久保教授らはこの患者に対し17年秋から、オプジーボの投与を臨床試験として開始した。約3カ月後、血液や画像の検査でがんが消え、この患者は現在、元気に働いているという。

今回の治験では印刷会社で起きたような職業関連性の胆管がんなど胆道がん患者最大16人を今後、登録。オプジーボの有効性と安全性を検討するために実施する。

久保教授は「胆管がんなどの新たな治療法の確立を目指している。一連の研究で、胆管がんの発症の詳細なメカニズムの解明にも迫りたい」と話している。

胆管がんは、肝臓で作った胆汁を十二指腸に運ぶ管状の器官である胆管の上皮にできるがん。
問い合わせは、国立がん研究センター東病院(04・7130・7130)、大阪府立大病院外科外来(06・6645・2346)。
【大島秀利】

毎 日 新 聞

2019年(令和元年)8月15日(木)

大 阪 22

大 阪